No.21

＋1（プラスワン）

〒658-0047　神戸市東灘区御影3-7-11
日本キリスト教団　東神戸教会牧師
2016年9月発行

「一人のＮＯ！」

牧師　横山順一

リオデジャネイロ・オリンピックで男子マラソン銀メダルを獲得したエチオピアのフェイサ・リレサ選手の行動に世界中で支援の輪が広がっている。

彼はゴールインの時、腕をバツの字形に交差し、出身のオロモ民族が政府から弾圧されていることに抗議した。

本来ならメダリストとして厚遇されるはずだが、帰国すれば投獄の可能性がある。だからリレサ選手を支えるカンパが集まっているのだ。

彼の行動はＫＹ（空気が読めない）ではなく、命を懸けた一人のＮＯ！の表現であり、叫びだ。

八月初旬、部落解放センターの青年ゼミナールが、神戸イエス団教会を会場に開かれた。

講師の一人Ｙさんが、賀川豊彦の功罪を述べた。多くの働きをなした賀川だったが、部落差別問題には関心がなく、貧しい人々への共感が足りなかった、と。

ところが、それを朗々語ったＹさんが続いて、或る教会の具体名を挙げて、「この教会は差別をした」と紹介したのだ。

すると即座に、Ｋ牧師が語気を強めて反論した。

「確かに以前そういうことがあった。しかし今は、現在の牧師を中心に過去の過ちを乗り越え、開かれた教会形成をしている。

その現在を語らないのなら、Ｙさんが言ったことは（新たな）差別をばらまいたも同じだ！」

会場は一気に静まり返った。Ｋ牧師が指摘しなかったら、多くの参加者は、当該教会に批判感情を抱いて終わっていたところだった。

藤木正三という牧師が『共に生きる』ことについて書いている。

『異に生きる』とよく言われます。本来一人で生きることのできない私たちにとって当たり前のこととして言われるのは、いかに私たちが差別的にしか生きていないかを示しています。しかし、『異に生きる』という言い方にも一種の気負いあり、優者の臭いがします。むしろ、自分を劣者として『相手から学ぶ』生き方を心掛けたいと思います。自分を劣者にして置かないという優者に変わるか分からないのが私たちですから。『異に生きる』は、『相手から学ぶ』の同義語と心得て使わないと危険な言葉です。」

熱気に包まれた場所で、皆が高揚している時、たった一人、過ちを正す発言をなすことは、極めて難しい。つい全体に合わせて、口をつぐんでしまう。と言うより、過ちに気づかないことのほうが少なくない。

私はいつもＫ牧師から、たとえ一人でもＮＯ！を叫ぶ」姿勢を学んでいる。

と同時に、それを言うためには、命について十分に学ばねばならないと自戒もしている。

差別に関して、もうよく知っていると思った瞬間、間違うことがあるからだ。

そして、その上で、ＮＯ！を叫ぶ者となりたいと思う。我らの主は、そのような人だった。